

戦争の遺物に光を当てた
写真集「パラオ」を出版

たなか まさこみ

田中 正文さん

市川市菅野



何も知らなかった自分が恥ずかしかった

海中の美しさを紹介するため、二十年ほど前に著述家から写真家に転身。パラオ近海の海にも何度も潜ってきた。だが五年前、同国大統領夫妻とのタイピングで目にしたのは、太平洋戦争時の旧日本軍の戦艦や航空機が海底に横たわる光景。「日本人としても、カメラマンとしても知らなかった自分が恥ずかしかった」と大きな衝撃を受けた。

「俺たちはここにいます」という、英霊たちの声に突き動かされて撮影を始めたが、当初はレンズが真っ二つに割れたり、原因不明の高熱で入院したりと、警告を受けるような出来事が多発。現地の人からも「日本兵が怒っているからやめなさい」と忠告された。だが、「やめなさい」と言われているのではなく、本気でやる気があるのか試されている」ところが、自問自答を繰り返して得た答え。撮影の後半は、驚くほど順調に進んだ。

五年間に及ぶ作業を通じ、写真家の仕事は「自分が美しいと思う被写体を選んで撮るのではなく、本当は被写体が語りかけるものを、写真というメディアに翻訳すること」だと気付いた。現在四十七歳。これからも太平洋戦争の遺物を追いかけるとともに、絶滅したニホンアシカや三番瀬の生き物など、「あまり人に見られないもの」に光を当てて行く。